

一年ゼミ「現代文章論」の実際

馬場 啓一

一 一年生とはどういう学生であるか

大学一年生は、少なくとも春学期においては、大学生ではなく、むしろ高校四年生と呼ぶのが相応しい。そう認識している。夏休みが過ぎるまで、高校四年生が継続している。

だからそれまでのクセや習慣を、まず取り除かなければ、先へは進めない。

いわば、パソコンにおける初期化に相当する施策を、行う必要がある。そう認識されている先生は多いのではないか。

だがいきなり初期化を行うのも、抵抗があるだろう。なにしろ彼ら善男善女は、何も知らずに入学してきているのだから。

そこで、春学期の冒頭まずやらせるのは「トナリの〇〇君」という作文である。十五、六名から成るゼミ生

を二人一組に分け、それぞれに互いの身上調査を行わせる。出身校や趣味、家族構成などなど。ワイワイガヤガヤまことに喧しい。それを元に「トナリの〇〇君」を書かせるのである。一種の聞き取り調査だ。四百字詰めの原稿用紙一枚が、その分量。

これは割合ノリますね。

ちなみに、かつては權威ある満寿屋の赤野の原稿用紙（のコピー）を使用していたが、原稿用紙にも著作権があるのではと思ひ、やめた。続いて市販のコクヨのをコピーして配ったが、これもうまくないと思ひ、現在は流通経済大学と用紙の中央に印されたものを、コピーして使っている。年間に、これは龍ヶ崎と新松戸両キャンパスを併せてだが、八千枚ほど使用する。講義でも同様に使うからである。両者を合わせて六百名ほどが受講しているから、こういう数字になる。

最初に行う「トナリの〇〇君」の作文で、今年のゼミ生諸君が、どういう文章を書く学生たちであるかが、大体知れる。

中に必ず一人、ちよつとウルサイ文章を書くのが混じっているのが毎年の通例。で、この学生が実は一番進歩が遅いのも、毎年のお約束。面白いものだ。こちらの指導に素直に従う気がないから、いつまでたつても上達しないのである。いかにも朴訥そうなのが、結局伸びる。柔道部とか剣道部とかに、躍進目覚ましい学生が多い。

二 原稿用紙

留学生は仕方がないが、日本人でも、原稿用紙の使い方を知らない学生が毎年いるのに、いつも驚かされる。

作文に熱心な高校の先生が各地に存在する一方で、ろくすっぽ作文など教えない高校があるのですね。日本の国語教育の荒廃を思い知らされる。

それでも、昨今はパソコンや携帯電話のメールの普及で、一行の字数の制限や行数への気配りが目立つ。これは良いことである。十年くらい前までは、例のレポート用紙に書くことしか知らない学生が相当数いて、字数と行数の説明から、しなければならなかった。

レポート用紙は早晚廃れていく存在であろうが、字数計算が基本の日本語には、大いに不向きな用紙なのである。そもそもは欧米のリーガル・パッドの流用だが、向こうは字数ではなく語数計算で文章量を測るし、第一その役目はタイプ原稿のための下書きだから、それでもいいのである。レポート用紙はイカンと説き、その理由として、一行の文字数が、大きな文字と小さな文字では倍ほど異なるのだと、実例を挙げて説明すると、成程という顔をする。

そういうわけで毎週せつせと原稿用紙（のコピー）を配りながら、文章を書かせている。

留学生に日本語の文章を教えるのは、なにかと気を使うが、原稿用紙をタテ使いにし、文章をヨコ書きにする中国人学生を見た時は、大いに驚かされた。思えば人民日報などもヨコ書きなのですね。漢字の宗家である中国だが、かつての伝統は捨て去られ、ヨコ書きで文章を綴っている。かの王羲之が漢字のヨコ書きを見たら、なんと言うだろうか、勝手に憤っている。

憤りの要因は何より日本語の文章はタテ書きと、頑なに信じているからで、学生にも断固これを強制する。

パソコンや携帯電話のメールなど、身近な文章は今日ほぼ全てヨコ書きであるという現実を尻目に、タテ書きにこだわる。日本語はタテ書きで千何百年も来たのである。草書などの崩し字も、タテ書きならばこそその存在で、日本語の根幹の問題だと思っている。丸谷才一先生のように歴史的仮名遣いに固執する方もいるが、現

況ではやや辛いものがある。だが、こと日本語のヨコ書きだけは、ゼツタイ許せない。

何より、原稿用紙をタテ使いにし、ヨコ書きで綴られた文章は実に異様である。それ一つを取っても、日本語はタテ書きに作られていることを確信する。

さらに言うなら、一般の原稿用紙の二十字×二十行という配列は完璧である。こちらが慣れているからだ、と言われてしまえばそれまでだが、人間生理を考慮しても、また目配りの点からも、実によく作られ考えられたものだと思う。

新聞社や通信社では十一文字とか変則を強いられるが、座りの悪い文字数だと思う。だからそういう時は二十字で書いて改めて十一字とかに直すのだが、極端に言うとは別の文章のように思えるときがある。

同じ文字数でも、二十字×二十行の文章と、十一字×三十七行の文章では、感じがガラリと異なる。人は、読む前に目で見て、文章を感じ取るからである。目で掴む、のですね。文章は見た目が大事なのだ。

逆に、単行本や本稿のようなタテ三十字や四十字という配列の場合も、大いに違和感がある。人間の目でタテに一目で追えるのはせいぜい二十数字までで、それ以上だと首をタテに振らねば文字を追えない。

そういう意味で原稿用紙の二十字×二十行という配列は絶妙なのだと、学生に説くのである。

三 小論文を克服せよ

文章論のゼミで最初に宣するのは、私の「現代文章論」の究極の目標は小論文の突破だ、ということである。就職活動における小論文の存在は昔から学生たちの悩みの種で、これをなんとか克服したいと学生たちは念じてきた。で、学生の人格個性がそのまま現れる面接や、積み重ねられた学業成績は、教師一人の力では如何

ともしがたいが、小論文だけは、ま、なんとかなるのですね、一年掛ければ。

そこで、学生に毎年まず、こう説く。

相手を知り己を知れば百戦危うからず、とは孫子の兵法であるが、小論文にもこれは当てはまるのだ。

重要なのは、相手すなわち小論文を読むのは誰か、である。

本学に赴任する以前、物書きを長くやっていた。そのもつと前はテレコム・ジャパンという、テレビ番組とテレビCMの製作会社に勤めていた。今はもう潰れて存在しないが、その後テレコム・スタッフというのを残党が興し「クラシック名探偵アマデウス」とか「世界の車窓から」というのを世に送っている。在社中はCM企画部長をやっていて、当時のヒットは「エリマキトカゲ」。

で、そういう役職だから、毎年の就職試験にも付き合わされた。人気稼業だから応募者の数は多かった。かの林真理子女史も受けに来た。落ちたけどね。

就職活動の一大テーマである小論文も、だから読む側にいたわけで、そのあらましは大いに承知している。実情は、文字通りいい加減で、クリエイティビティ（想像力）を感じさせれば可、とした。テレビ関係だから、そうなる。元テレビ局の制作の現場にいたオジサンや、コピーライターのオバサン、物書きくずれのお兄さん、といった連中が審査するのだから、いい加減なのは当然だ。

こう前振りをしてゼミの学生に説くのは、普通の企業や役所でも、小論文は人事部のオジサンやオバサンが読むのだ、という現実である。どういう会社であれ、小論文の権威みたいな人間が諸君の小論文を読んでいるのではない、という厳然たる事実である。小論文の書き方の本を書いた連中が、基本的に間違っているのはここである。

どこにもプロなんかいないのだ。

そうなのだよ、諸君。なにも恐れることはないのだ。相手も諸君とチヨボチヨボなのだ。

すなわち、文学に習熟したオジサンや、文章の権威のオバサンが読むのではなく、普通のオジサンとオバサンが、学生の小論文を読み、可否を判定しているのである。普段はスポーツ新聞しか読まないオジサンや、新聞もテレビ欄しか見ないオバサンが、お仕事だから仕方なしに読んでいるのだ。

その意味で、世に佃煮にするほど存在する小論文の書き方なる本は、ブック・オフへ売ってしまえばと煽動する。なにより、本の書き手が偉そうにしているのが間違っている。自分たちのような文章の達人が読むと思いついていて、この手の本の大きいなる勘違いが存在する。

小論文とは、フツターの人事部のオジサンやオバサンが、こういう文章を書く学生ならウチに入りたい、是非採りたいと、思わせるものであればいいのだ。

学生はここで、それなら書けそうだと、思わず膝を乗り出すね。小論文突破のカギは、ここか。

逆に言うなら、妙にヒネた文章を書く学生はイケナイ。彼らは大体決まって遅刻が多かったり、よその課の女の子に手を出してモンダイになったりする。というのを、オジサンやオバサンは経験則で知っている。

普通の文章で良いのである。読みやすい文章を書けばよい。

そして、常識的な人間であることをアピールせよ。本学の学生が通常目指すのは、スタジオ・ジブリやゲーム・ソフトの会社ではない。いわゆる固い会社、地元の役所。だから、自分が世間のルールを遵守する学生だということを、充分に知らせなさい。

そういう風に説くのである。

四 文章作法の実際

プールのない水泳教室はインチキだろう。自転車の乗り方を何時間教えても、実際に乗ってみなければ漕がないではないか。

ゼミで説くのは、これである。

実際に書かなければ、カケマセン。だからガンガン書かせる。そしてその究極の目的は小論文の突破にあると、毎週叩き込む。

その実際。まず「私は」を排除すること。

これは割合にインパクトがある。すなわち「私は」がなくても文章は成立するし、私が書いているのだから、何もわざわざ「私は」と書くことはないのである。で、実際そのようにすると、これは驚き、文章が締まるのである。

高校四年生の大学一年生にとって、大人っぽく見えることは大きな目標である。見た目もそうだが、文章も、大人らしさを感じさせるものでありたい。そう念じている。そこに、この「私は」を排せよ、そうすると大人の感じになるぞ、と説かれるのは相当に効き目があるようで、春学期の終りにはほぼ全員がこうなっている。なっていないとすれば、その学生はゼミに出てきていないから。それほどの違いがある。そして「だ」、「である」で統一すること。

丁寧な文章を目指すあまり、つい「です」、「ます」で書きたくなってしまふのだが、それはイケマセンと説く。

なぜか。ここでもちゃんと答えは用意してある。すなわち達意の文章を目指すためである、と。

文章の本意は相手に意を通じさせることである。意を伝えることだ。それが達意の文章。そして小論文とは、その達意を本願にする存在に他ならない。

エッセイや作文と何処が違うのかと問われたら、小論文は自分の意や考えを相手に伝える文章なのだと答えなさい。そう伝える。

日記や手紙とも違うし、メモや記録文でもない。小論文は、その名の通り論を綴っている。ただ、五十枚百枚の論文と異なり、せいぜい原稿用紙二枚程度で終息する。

さらに畳み掛けるように「喋り言葉」を排せよと続ける。

じつはこれが一番難しい。学生たちは相当な努力を強いられる。「喋り言葉」は蔓延するウィルスみたいなもので、彼らを十重二十重に取り囲んでいる。例えば「なので」例えば「とつても」そして「だけど」。まさに枚挙にいとまがない。

これを正すのに使う言葉は「エラそうに書け」である。どなたかの文章読本にあった教えであるが、読む人に対してテレたり、妙にへりくだったりすると文章は品位を欠いてしまう。小論文は堂々と相手に自分の意や志を伝えるべきもので、そこには背筋の伸びた、スッキリした姿勢が不可欠なのである。「喋り言葉」は、せっかくの堂々たる態度が井戸端会議のお喋りに堕してしまふ、危険な物言いなのであると、説得する。

大いに注意することと説くが、難しいのですね。回りがそういうのばかりだから。

就職活動とは建前の運動である。普段はジーンズにTシャツの人間が慣れないリクルート・スーツを着込み、会社や役所を訪問する。それが建前だ。セーターで臨んだら、まず門前払いである。

そういう例を実際に知っている。四十年前の話だが。友人がセーター姿で業界五位の広告代理店を受け、落とされた。一流大学出身で学業成績も良かったから、驕っていたのだろう。当人も（相手先の人事担当者も）

シヨックだったが、役員の決定だから仕方がない。で、業界一位の代理店（あの会社です）を受け、見事合格した。応募学生中一番の成績だったと、記録が残っている。で、数年で辞めましたね。業界五位に落とされたシヨックは、彼の人生で最もインパクトの大きなものだったそうだ。以上余談。

（ちなみにこれは毎年ゼミで学生に話している。シーンとして聴いている）

五 結論をまず書け。そして短く

小論文を書く上で忘れてはならないのは、結論をまず書くこと。

これまで「私は」を排し「だ」、「である」で文尾を統一し「喋り言葉」を除染した上で心掛けること、それがこの教えである。特に原稿用紙二枚か、せいぜい文字数にして千字の小論文では、冒頭の結論が重要である。例に出すのは「ラーメン屋の理論」。

すなわちラーメン屋では入店すると「いらっしやい、何にしましょう」と店先で問われる。これに対する正しい答えは「ラーメンと餃子ください」であり「チャーシューメンと、あと、ビール」などであろう。

それを「この店の構えは、いかにもラーメン屋らしくて脂で煤けているのがいいね、親父さん」とか「ここは通りに面して客の出入りが多く、さぞ繁盛しているだろう」というのは、ラーメン屋における最初のやり取りとしては相応しくない。ないでしょう。

客は注文の品をまず唱え、伝えなければならない。ご託を並べるのは、その後だ。以下、立ち食い蕎麦屋でもマクドナルドでも同じ。そしてこれは小論文でも同様なのだ。まず、答えを言え。

例えば「少子高齢化対策」とか「地球温暖化対策」といった命題を課せられたら、とにかく冒頭に、それらに対する解答を結論として掲げなければならない。これ鉄則。

すなわち「少子高齢化対策」においては、「女性の社会参加を容易にし、出産が負担とならならない環境を作る」ことが重要である」とか「地球温暖化対策」には「省エネを心掛けること、それが急務である」と言った具合に、具体的かつ包括的な結論を記すことが要求される。

実はこのような結論を学生に書けと要求するのは、無理がある。難しいよ、大人でも。それを承知で彼らに課する。その上で、こう付け加える。「暗記せよ」と。小論文は暗記なのだと言っていると、一様に驚く。だが、多くの企業や役所で出される小論文の課題は毎年一つの傾向があり、それを付度した上での、ことなのだ。

本当は、新聞を毎日熟読せよ、テレビのニュース解説を欠かさず見なさい、といった教えを垂れているのだが、ままならない。なかなか実行に移さないのである。そこで、一つのパターンとして、以上のような課題に対する解答を暗記させるのだ。英語の構文を覚えるのと、これは似ていようか。

そして最後にまとめると、小論文の要諦は「短く書く」こと。これに尽きる。その意味はここに記すまでもなからう。短い文章は相手にダイレクトに伝わる。スピーディに伝わること、それこそが小論文のキモなのである。ちなみにこの「キモ」も、学生の喋り言葉の範疇に入るから、就職活動における小論文で使ってはならない。

四月にゼミをスタートさせ、実質的には十二月で終りになる。一月は試験の季節であり、ゼミはもう済んでしまっている。だから年末が事実上ゼミの最後になるのだが、この頃には真面目に教室に来ていた学生はスラスラと文章を書けるようになっていく。ラストで「ゼミで学んだこと」を書かせるのが毎年の恒例になっているのだが、十五人中十人は、まるで信じられないことだがとか、文章があんなに苦手だったのに、とか前置き

して、ところが今は平気で書いてしまう自分がいる、と記す。これはなかなか感動的である。

最後に

一年生のゼミで何をどう教えたなら良いのか、まるで雲を掴むような塩梅でスタートさせたのが八年前である。大きな柱は小論文だとすぐ気がつき、カリキュラムをそれに添って組んだ。

もう一つ「中」テーマとして「手紙」を取り入れており、これは女子に好評であった。今も続けている。彼女たちが母親にそれを言くと、羨ましがられるのだそう。大学生で手紙の書き方なんかやっているのかいと叱られるのかと危惧したが実情は逆で、本当は自分も教わりたいと、母親たちは言うらしい。面白いですね。わかるような気がする。

手紙のテーマは、春学期の成果を学長に報告すると言うもので、女子は「拝啓」ではなく「一筆申し上げます」でも「可」なんだと教えると、どういうわけか嬉しそうである。いかにも大人っぽく見えるのが、いたくお気に召しているらしい。八十の婆さんになっても、孫に教えられるよと毎年言って、失笑を買っている。大きい教室での講義の方でも同じことを教えている。

ゼミでは春学期も秋学期も試験がなく、出席率と個々の向上の具合で年度末に採点するのだが、手紙を教わったことが良かったと、毎年女子は感想を書く。

男子はどうか、よくわからない。何より小論文のマスターに彼らは必死なのだ。